一般演題（1A2-4）

NASVA療護施設入院患者のナスバスコアを用いた治療改善効果分析

野津　真生

独立行政法人 自動車事故対策機構

【目的】独立行政法人自動車事故対策機構（NASVA）では、全国7カ所の療護施設において自動車事故による重度後遺障害者（遷延性意識障害者）専門の治療と看護を行っている。平成17年度より適用を開始した「遷延性意識障害重症度評価表」（ナスバスコア）による入院患者の改善度について、統計的手法を用いたデータ分析を実施し、その治療改善効果を検証する。
【方法】調査対象は、6療護施設（開設から間もない泉大津市立病院（委託病床）は対象としていない）であり、平成17年6月1日から平成26年5月31日までに退院した患者（578人）と、平成22年度～25年度の各年度（当該年6月1日から翌年の6月1日までの一年間）に在院した患者（延べ1,030人）である。「ナスバスコア」は、6項目（運動機能、摂食機能、排泄機能、認知機能、発声発語機能、口頭命令の理解）につき各項目10点でスコア化され、最重症は60点である。
【結果】入院から退院までの分析及び各年度毎の分析のいずれにおいてもスコア平均値が低減している。入院から退院までの場合、入院時のナスバスコアが高くても改善している患者がいること、入院までの事故後経過期間が短いほど改善が良いこと、並びに入院時年齢が若いほど改善が良好であるものの他の要因と比べると年齢の影響度合いはそれほど大きくないこと、が認められた。
【まとめ】NASVA療護施設における治療・看護が遷延性意識障害者の改善のために有効であることが改めて確認された。現在、療護施設では過去のような長期の入院待ちの状況は発生しておらず、一部では空床も恒常化していることから、患者・家族及び関係機関への広報に努めるとともに、円滑な患者受け入れを促進する。